

<p><b>佐賀県唐津湾西部域におけるカサゴ種苗の放流効果</b> 藤崎 博・古川泰久・荒巻裕・金丸彦一郎</p> <p>2003, 2004年度に佐賀県唐津湾西部海域（関係地区：唐津市妙見, 唐房, 相賀, 湊浜）に標識放流したカサゴの追跡調査を2008年度まで実施し, 放流効果の検証を行った。</p> <p>鰭抜去標識は, 5年後（約1,800日後）でも識別が可能であり, カサゴの標識として有効であることが確認された。標識魚の移動は, 放流場所から3kmと狭く, 定着性が強いことが確認された。混入率は, 放流数や放流場所, 調査時期に加え, 天然魚の生息密度でも異なることから, 単純に評価できないが, 本調査での標識魚の混入率は15.8%であった。</p> <p>唐津湾西部海域における標識放流により一定の放流効果が確認されたことから, 当県玄海地区全域で漁業者が放流経費の一部負担するカサゴの放流事業が2009年から開始されている。</p> <p style="text-align: right;">佐玄水産セ研報 8（1-5）2017</p>	<p><b>佐賀県玄海海域における藻場の現状と課題（ノート）</b> 藤崎 博</p> <p>佐賀県玄海海域でも, 小規模な磯焼けの発生や水温の上昇が確認され, 今後の水温上昇によりアラメ等の海藻が影響を受けることが予測されており, 在来種の一部の海藻にとっては不安定な環境にあると考えられる。過去の調査結果や玄海水産振興センターの藻場調査結果を踏まえて, 玄海海域の藻場の現状と課題を整理した。</p> <p>調査年別の大型褐藻類の出現種数は, 1992~93年が21種, 2004年が22種, 2014年が20種であった。長崎県海域で分布域が拡大している南方系ホンダワラ類も確認されなかったことから, 本県玄海海域の大型褐藻類の種類はここ20年間で大きな変化はないと思われる。</p> <p>これまでのところ, 当県玄海海域の磯焼けの原因は, ウニであり, ウニの密度管理を行うことで藻場が回復することも明らかとなっている。</p> <p style="text-align: right;">佐玄水産セ研報 8（11-15）2017</p>
<p><b>佐賀県玄海地区におけるカサゴ漁獲量の推定（ノート）</b> 古川泰久・金丸彦一郎</p> <p>佐賀県玄海地区のカサゴ漁獲量を推定することを目的に, 漁連魚市場と唐津魚市場の伝票を集計し, 唐津港水揚量を求めた。さらに関係漁業者に対し, カサゴ出荷重量の割合に関するアンケート調査を実施した。</p> <p>当県玄海地区における2003年から2008年までの6カ年間のカサゴの推定漁獲量は33~65トンの範囲で推移しており, 唐津港水揚量の1.6~1.7倍と推定された。</p> <p style="text-align: right;">佐玄水産セ研報 8（17-18）2017</p>	<p><b>佐賀県玄海地区におけるカサゴ放流事業開始後の水揚実態と課題（ノート）</b> 藤崎 博</p> <p>佐賀県玄海地区で, 水揚量の減少が続いていたカサゴの種苗放流事業が2009年から開始された。カサゴの放流尾数は, 水揚尾数と同レベルであり, 天然資源に対するインパクトは大きいと考えられ, 減少傾向にあった水揚量が, 放流効果により増加に転じた。今後も, 放流効果を検証するために, 水揚量とCPUEのモニタリングを継続する必要がある。</p> <p style="text-align: right;">佐玄水産セ研報 8（19-20）2017</p>
<p><b>2014年夏季に唐津湾佐賀県海域で発生した <i>Chattonella</i> 属赤潮（ノート）</b> 河口真弓・津城啓子・吉田幸史・野口浩介・藤崎 博・寺田雅彦・明田川貴子・首藤俊雄</p> <p>2014年夏季に唐津湾佐賀県海域において <i>Chattonella</i> 属赤潮が発生した。本赤潮は7月15日に初認され, 最高細胞密度は7月18日は <i>C. antiqua</i> が31,200cells/mL（Stn. 3, 表層）, <i>Chattonella</i> spp.が500cells/mL（Stn. 4, 表層）であった。20日以降は減少傾向となり, 23日以降は100cells/mLを超える高密度層は確認されなかった。28日には全地点で未確認となったため, 唐津湾佐賀県海域における <i>Chattonella</i> 属赤潮の終息とした。</p> <p>なお, 本赤潮による漁業被害については報告されていない。</p> <p style="text-align: right;">佐玄水産セ研報 8（21-25）2017</p>	<p><b>2014年夏季に佐賀県北部沿岸域で発生した <i>Karenia mikimotoi</i> 赤潮（ノート）</b> 河口真弓・津城啓子・吉田幸史・野口浩介・寺田雅彦・明田川貴子・首藤俊雄</p> <p>2014年夏季に佐賀県北部沿岸域において渦鞭毛藻 <i>Karenia mikimotoi</i> が広域で確認された。最高細胞密度は, 唐津湾では46cells/mL, 鎮西町・呼子町管内では7,600 cells/mL, 伊万里湾では28,600cells/mL, 仮屋湾では5,500 cells/mL確認された。漁業被害は, 鎮西町・呼子町管内での被害額約35万円をはじめ, 伊万里湾においても被害額約332万円確認された。</p> <p style="text-align: right;">佐玄水産セ研報 8（27-43）2017</p>

<p>2015年夏季に佐賀県北部沿岸域で発生した <i>Karenia mikimotoi</i> 赤潮（ノート）</p> <p>吉田賢二・河口真弓・吉田幸史・東 一輝・首藤俊雄</p> <p>2015年夏季に佐賀県北部沿岸域において、渦鞭毛藻 <i>Karenia mikimotoi</i> が広域で確認された。</p> <p>最高細胞密度は、唐津湾では21,900cells/mL、仮屋湾では940cells/mL、伊万里湾では3,300cells/mL、鎮西町・呼子町管内では310cells/mL、外津浦では24cells/mLとなり、離島のうち神集島においても780cells/mL確認された。</p> <p>漁業被害は、唐津湾での被害額約4百万円をはじめ、仮屋湾においても真珠養殖用アコヤガイに確認された。</p> <p style="text-align: right;">佐玄水産セ研報 8 (45-58) 2017</p>	<p>2014年、2015年および2016年に佐賀県仮屋湾で発生した <i>Alexandrium</i> 属および <i>Gymnodiniumcatenatum</i> による二枚貝の毒化（ノート）</p> <p>東 一輝・河口真弓・吉田賢二・吉田幸史・首藤俊雄</p> <p>2014年10月に佐賀県仮屋湾で、<i>Alexandrium</i> 属および <i>Gymnodiniumcatenatum</i> の増殖が確認され、同年12月に仮屋湾産養殖マガキから規制値（麻痺性貝毒4 MU/g）を超える麻痺性貝毒が検出されたが、2月には規制値を下回った。</p> <p>さらに、2015年10月にも仮屋湾において、<i>Alexandrium</i> 属および <i>G.catenatum</i> の増殖が確認され、翌2016年1月に仮屋湾産養殖マガキから規制値を超える麻痺性貝毒が検出されたが、2月には規制値を下回った。</p> <p style="text-align: right;">佐玄水産セ研報 8 (59-71) 2017</p>
<p>PSP-ELISA（麻痺性貝毒簡易検査キット）を導入した佐賀県における貝毒モニタリング体制の検討（ノート）</p> <p>河口真弓・川津健太郎・吉田幸史・野口浩介・首藤俊雄</p> <p>本研究では簡便かつ迅速な測定が可能な、酵素免疫測定法（enzyme-linked immunosorbent assay; ELISA）を当県の貝毒モニタリング体制に導入することを目的とし、当県における毒化二枚貝類について、PSP-ELISA、公定法およびHPLCによる測定結果を比較し、PSP-ELISAの有用性を検討した。</p> <p>その結果、公定法との相関は、HPLCよりPSP-ELISAの方が良く、PSP-ELISAを、当県の貝毒モニタリング体制におけるスクリーニング検査として導入することで、簡便かつ迅速な対応が可能な貝毒モニタリング体制とすることが可能であることが示唆された。</p> <p style="text-align: right;">佐玄水産セ研報 8 (73-76) 2017</p>	